

短 報

社会福祉実習が学生に与える効果についての研究(1)

田淵 創 竹内一夫 田口豊郁 真野元四郎

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成9年11月19日受理)

A Study of the Effect on Students of Field Work in Social Work Education

**Hajime TABUCHI, Kazuo TAKEUCHI, Toyohiro TAGUCHI
and Motoshiro MANO**

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Nov. 19, 1997)*

Key words : field work in social work education,
image questionnaire, institutions (nursing home)

はじめに

現場に実習生を送り出して、はや4年の月日が経とうとしている。その成果については毎年社会福祉援助技術現場実習報告集としてまとめられ、学内・学外報告会において発表されている。また、われわれは毎年実習の後で、学生に対しアンケート調査を行い、学内実習を含めて実施した実習すべてについての意見、感想、評価を記述させ、その反省すべき点および現場実習の教育効果を測定している。

そのアンケートの中の「今回の配属実習を終えて、あなたの考え方、態度に変化が起きましたか」という設問に対して、例年1～2名を除くほとんどの学生が「はい」と答えている。その回答内容を分析、検討をしたところ、彼ら

の変化は次の4つに集約されると考えられる。

1) 専門家としての態度形成

客観的態度、偏見の解消、ソーシャルマナー、問題意識を持つ

2) 自己成長

相手の理解の増加、自己の内的変化

3) コミュニケーションの大切さの認知

傾聴、積極的関わり、援助技術

4) 福祉職への理解

将来の仕事、福祉職の理解

今回はそのアンケート調査に組み込まれた、『施設に対するイメージ調査』の結果をもとに社会福祉実習が学生に与えた影響を考察し、上記の変化についての分析結果を追認したい。

現場実習の内容と目標

川崎医療福祉大学医療福祉学科における現場実習の内容と目標は次の通りである。

内 容

- 実習Ⅰ：事前学習（講義，施設見学等）
 自主学習（30時間以上）
 実習Ⅱ：配属実習（4週間，180時間以上）
 任意実習
 実習Ⅲ：事後学習（報告書作成とグループ学習）

目 標

1. 現場体験を通して「専門知識」，「専門援助技術」及び「関連知識」の内容の理解
2. 介護を必要とする人に対する「相談援助業務」に必要となる資質・能力・技術の習得
3. 職業倫理を身につけ，福祉専門職としての自覚に基づいた行動
4. 具体的な体験や援助活動を概念化し理論化し体系だてていくことができる能力
5. 関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容の理解

調査対象

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科3期生（平成9年3月卒）で特別養護老人ホー

ムで社会福祉現場実習した学生92人（男性23人，女性69人）

本調査は，上記実習Ⅱの終了した後の，実習Ⅲの最初の授業で行った。（現場実習の多くは3回生の春季休業中に行われるが，一部は4回生になってから行われるものもある。したがって，調査時期は平成8年の4月から10月までとなる）

調査方法

アンケートにより質問に対する自由回答を求めた。

『あなたが実習にいった施設の種別は「……」です。では，あなたが書いたこの単語を聞いて連想するものを思いつくままに書いてください。（いくつでもかまいません）』

調査結果

その結果，書かれた単語の数は461語で，1人あたりにすると5.01個となり，星野が実習前の3回生（4期生）に行った調査結果4.71個（表2参照）と大差はない。これらを分類したところ，表1のようにその他を含めて7つに分けることができると思われる。さらにそれぞれプラス，マイナスの評価を含むもの，中立的なもの3つに分類した。（表2）

星野は自身の結果から次のように結論づけて

表1 連想語の数の比較

	実習後学生（92人）	3回生（93人）	A大学生（47人）
① 施設の様子・イメージ	83個（18.0%）	131個（29.9%）	6個（3.4%）
② 利用者の生活	171個（37.1%）	114個（26.0%）	3個（1.7%）
③ 施設に関わる人	67個（14.5%）	43個（9.8%）	43個（24.0%）
④ 職員について	41個（8.9%）	28個（6.4%）	11個（6.1%）
⑤ 建物・設備について	26個（5.6%）	21個（4.8%）	22個（12.3%）
⑥ 施設の種別	29個（6.3%）	16個（3.7%）	37個（20.7%）
⑦ その他	44個（9.5%）	85個（19.4%）	57個（31.8%）
計	461個（100%）	438個（100%）	179個（100%）

注) 1 3回生及び他大学の結果は，星野和代（1997）福祉施設に対する大学生のイメージ，1996年度川崎医療福祉大学卒業論文（指導 田口豊郁）の結果を参照した。

注) 2 3回生は医療福祉学科（男性19人，女性74人）
 A大学は文，社，経済，経営，法学部の3回生（男性31名，女性16名）

表 2 連想語の内容の比較

	マイナス		プラス		中立的	
	実習後学生	3 回生	実習後学生	3 回生	実習後学生	3 回生
① 施設の様子・イメージ	閉鎖的 (7) 隔離 (6) 暗い (5) 街から離れている (3) 汚い (3) 臭い (2) など 計37	閉鎖的 (26) 街から離れている (21) 隔離 (16) 暗い (14) 汚い (9) 臭い (9) など 計114	明るい (9) 暖かい (8) 笑い、楽しい (5) など 計27	なごやか (2) きれい (2) 家庭的 (2) あたたかい (2) やさしい (2) など 計17	老人の生活の場 (19) 計19	計 0
② 利用者の生活	自由がない (5) 管理 (4) プライバシーがない (2) 規則 (1) など 計16	自由がない (23) プライバシーがない (9) 淋しい (7) 規則が厳しい (5) など 計90	いきかい (3) 自由 (1) 計 4	友だちができる (6) 介護してもらえる (4) 行事があり楽しい (2) など 計24	痴呆 (31) 排泄 (29) 寝たきり (28) 要介護 (14) 食事 (13) 特殊浴槽 (10) 集団生活 (9) など 計151	計 0
③ 施設に関わる人	恐ろしい、冷たい 寮母 (2) 計 2	計 0	愛情、優しい (2) 計 2	計 0	高齢者 (29) 寮母 (19) 生活指導員 (4) など 計63	老人・障害者 子ども (29) ボランティア (7) 家族 (2) など 計43
④ 職員について	重労働 (5) 忙しい (5) 介護が大変 (3) など 計16	介護者中心の介護 (8) 職員の質の問題 (4) など 計22	介護が充実 (1) コミュニケーション がよい (1) 計 2	一生懸命の介護 (2) 計 2	介護 (15) 清拭 (3) エプロン (2) など 計23	職員が女性中心 (1) 専門性 (1) など 計 4
⑤ 建物・設備について	計 0	囲いがある (3) 無味乾燥な建物 (2) 計 5	計 0	設備がよい (7) 温かい環境設計 (1) 計 8	車椅子 (15) ベッド (9) バリアフリー (1) など 計26	車椅子 (5) ベッド (1) など 計 8
⑥ 施設の種別	計 0	計 0	計 0	計 0	デイサービス (10) 在宅介護支援 センター (8) ショートステイ (7) など 計29	老人ホーム (5) など 計16
⑦ その他	ニーズが掴みにくい (1) 計 1	社会に浸透して いない (6) お金がかかる (6) 差別・偏見がある (3) など 計26	終末期施設では ない (1) 計 1	生き方の変革 (1) 情報が得られる (1) 期待 (1) など 計11	ターミナル (9) 死 (7) リハビリ (4) 褥そう (2) 地域 (2) など 計42	リハビリ (6) 介護 (4) 生活 (1) 慰問 (1) 援助の源 (1) 社会福祉 (1) など 計48
合 計	72 (15.6%)	257 (58.7%)	36 (7.8%)	62 (14.2%)	353 (76.6%)	119 (27.2%)

いる。

1) 福祉を学ぶ学生の方が、施設の様子・イメージや利用者の生活のことについて具体的なイメージを持つものが多い

2) 逆に、福祉以外の学問を学ぶ学生は、抽象的なイメージで捉えているものが多い。

しかし、同じ福祉を学ぶ学生であっても今回の実習後の学生の結果をみればそこには大きな違いが見られる。実習前の学生は施設の様子・イメージの表記が一番多かったのに対し、実習後の学生では利用者の生活に関する語句が37.1%と施設の様子・イメージの2倍以上書かれている。 $(\chi^2 = 22.01, p < 0.001)$ この結果は、実習に行くことによって、「施設は利用者の生活の場であり、まず利用者を第一に考える」という基本的なフレームの確認が学生の間で行われているのではと考えられる。

また目に着くのが施設に対するマイナスイメージの減少である。実習以前の学生は具体的なイメージではあってもマイナスのイメージが大半であったものが(257個:58.7%)、実習後は72個:15.6% ($\chi^2 = 226.49, p < 0.001$) にすぎない。もっとも、②利用者の生活にある「痴呆」「寝たきり」「排泄」「要介護」、あるいは⑦その他の「ターミナル」「死」などは多くの学生が実習においてとまどう事柄であり、マイナスのイメージが強いものかも知れない。しかし、これらすべて(利用者の生活の151個と「ターミナル」と「死」の16個、計167個)をマイナスの中に入れてとしてもやはりマイナスのイメージは減少している。 $(\chi^2 = 21.69, p < 0.001)$ したがって、福祉を学ぶ学生の間にも多くみられた施設に対するマイナスのイメージ(こうしたイメージがどのように形成されていったのか解明されなければならないが)が実際に実習することによってある程度払拭され、偏見の解消、客観的態度の形成がなされ、専門家としての態度が育ちつつあるといえよう。

ただ、表2からわかるようにそれらがただちにプラスのイメージに変化したわけではない。施設あるいは職員、職務内容にはまだまだ多くの問題が残されており、それらについての具体的な問題意識も芽生えつつある。

しかし、中立的項目の内容をみると、目前の利用者の実態に目を奪われ、利用者の生活を、その人生、家族、地域などを含めてトータルに捉えるといったところまではいたっていない。特別養護老人ホームでの実習においてはどうしても介護が優先される。われわれは、その日々の介護を通して利用者との関わり、コミュニケーションを考えるように指導を行っているが、学生にとっては日々の介護業務に追われ、介護技術に目がいつている側面は否定できない。

謝 辞

本研究は平成6年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費によったことを付して感謝する。